

# 『陳十四夫人伝』と『西遊記』の類似について

廣 田 律 子

中国浙江省の麗水を中心に伝承されている鼓詞は陳夫人への願かけや願もどしの中で説唱され、陳夫人（陳靖姑・陳十四）という女神への信仰を背景にできあがった芸能である。鼓詞で説唱される内容は陳夫人の出生から始まり、修行、妖怪退治、死後神と祀られるまでの所業が述べられる。

この陳夫人の冒険譚には、中国の民衆に親しまれてきた種々な語り物のエッセンスがふんだんに盛り込まれている。この語りは小説化されている。種々な点で『西遊記』と同様の経過を辿っているといえる。本稿では実際に唱われている鼓詞の記録されたテキスト『陳十四夫人伝』と小説化された『西遊記』とを内容の上での比較を試みることにする。

大塚秀高<sup>四</sup>によれば、

北宋以前の、福建を中心とする江南沿海地方に、鬼国説話が流布していたことはまず間違いない。この

鬼国説話が、すでに密教と結びつき、これを得意とする説教僧、赴応僧（以下説教僧により両者を代表する）によつて福建の処々で語られていた西遊記物語（この段階では物語といえる実質は具えていなかったかも知れないが）に取り入れられた後、都臨安で説話四家の説経あるいは講経に属する芸能者によつて洗練され、時をへて読み物として刊行されたもの、それが『詩話』であり、福建に留まり、聖者などと呼ばれた説教僧の手で発展を遂げたもの、それが『游宦紀聞』巻四に見える張聖者の語る西遊記物語だったのではあるまいか。『西遊記』がもとと説教僧と共に成長した物語であつたと仮定すれば、陳光蕊説話が福建地方刊行の『西遊記』の刊本にのみ挿入されている事実も無理なく説明がつこう。水陸大斎の効能や靈験を語り、説教僧にとつて欠くべからざるものだった『詩話』の「女人国」の段が変質し、「陝西王長者」の段が失われるや、これを別の

もので補う必要に迫られたからである。現存する明代の『西遊記』の刊本中、唯一陳光蕊説話を具える朱鼎臣本は上図下文の福建刊本であった。

とあり、信仰を背景として宗教者によって語られ発展してきたことから見て『陳十四夫人伝』は成立において『西遊記』と近く、この内容の類似を探ることで中国の語り物の特質も明らかにできると考える。また聞き手であり読み手である中国の人々の嗜好が反映されていると考えられる語りと読み物において、欠くことのできない要素とは何かを探ることに繋がると思われる。

両者の類似点としては、次の十二の点が挙げられると考える。

- 一、修行を積み法術を得る
- 二、生まれの不思議
- 三、天を騒がせる
- 四、動物の精・植物の精・虫の精・菩薩等の所有物が変じて妖怪となる。人を騙したり、害したりする妖怪は退治される
- 五、舞台となる地名が入れられている
- 六、地獄巡りをし、死者を生き返らせる
- 七、観音との縁、度々助けられる
- 八、戦いの場面での種々な変身

#### 九、子どもの供儀

十、行ないに対して仏から期限をつけて罰を与えられる

#### 十一、夢枕に立つて意志を伝える

#### 十二、神や仏に封神される

以下に一点ずつ例を挙げてみることにする。

一、「修行を積み法術を得る」については、『西遊記』一回〜二回にかけて悟空が靈台方寸山の斜月三星洞の須菩提祖師に弟子入りし、修行の結果七十二般の変化を修得するとある。またとりものの如意棒は竜王から貰うとされている。

一方『陳十四夫人伝』の一冊六段には陳靖姑が廬山の師に弟子入りをし、法術を学び、紙の馬などの宝を与えられるとある。

二、「生まれの不思議」については、『西遊記』では悟空は石から石の卵が生まれ、風を受けて石猿になったとある。

『陳十四夫人伝』では、陳靖姑は、観音の指の血を飲んだ母が懷妊して生まれたとされる。

三、「天を騒がせる」については、『西遊記』では、四回五回に、悟空が天宮を荒したとある。

『陳十四夫人伝』一冊六段に陳靖姑が法術を試したこと、天地をひっくり返すことになったとある。

四、「動物の精・植物の精・虫の精・菩薩等の所有物が変じて妖怪となる。人を騙したり、害したりする妖怪は退治される」については、動物が変じて妖怪となる例は大変多い。『西遊記』では、七十九回に白狐が美人に化け国王を騙し、子どもの心肝を薬にさせようとする。また八十九回では、虎・彪・馬・鹿・山羊・豚・羊・獅子等の化けた妖怪を悟空がさんさんにやつつける。

菩薩等の所有物が変じて妖怪となる例としては、『西遊記』の七十一回では、菩薩の乗り物であった金毛犼が逃げ出し、賽太歳という妖怪に化け、朱紫国の皇后を誘拐してしまう。七十九回では、寿星の乗り物の白鹿も逃げ出して、老人に化け、比丘国の国王を騙し、悟空をさんさんな目にあわせる。

『陳十四夫人伝』では一冊五段に、天敵の蛇の妖怪が、陳靖姑に化け、陳靖姑より先に廬山で修行を行なう。二冊三段に、豚の妖怪が王志忠に化け、その留守に乗じて家に入り込んで妻を思い通りにしてしまう。二冊五段では、狐の精が美人に化け役人の范三府の夫人となる。二冊七段では、獵犬が月の宝を飲んで、白犬精となり、美男子に化け、虞秀英が魅入られてしまう。三冊二段く三段では、蛇の妖怪が皇后に化け、陳十四の心肝を薬にして欲しいと王にねだる。

二冊六段では、陳靖姑が道中多種多様な三十四の妖怪

に出会い、退治していく。

大半が陳靖姑によって誅滅されるのだが、中には神として封じられたり、命を助けられたりする妖怪もいる。例えば吊死鬼は地姑仙娘とされ、儉箸鬼は儉箸神とされる。獼猴は足を一本断たれ、三尾の鯉の精は一尾が許され、二羽の鷓鴣も一羽が許され、八頭の豚は二頭が許されるといったところである。

特に観音の髪から生じたとされる蛇の妖怪は再三再四陳靖姑を苦しめる。同じ観音の化身として、陳靖姑は善蛇は悪を象徴し、両者戦うが、勝負はなかなかつかず、どんでん返しの連続である。

『西遊記』の六十七回にうわばみを退治する話があるがさほど強い相手ではなく、陳靖姑にとつての蛇のような敵は悟空にはいないようである。

五、「舞台となる地名が入れられている」については、『西遊記』でも『陳十四夫人伝』でも必ず舞台となる地名が明らかにされている。語りではご当地に神が現われることが重要であり、人々が神の存在を実感する為には、自分たちの生活の場、身近な地域の名が呼ばれ、神の所業が唱われる必要があったのである。

六、「地獄巡りをし、死者を生き返らせる」については、『西遊記』では、十回から十一回に太宗皇帝が地獄巡りをし、寿命が尽きていないとされ、生き返る。十八層の

地獄には、吊筋地獄・幽枉獄・火坑獄・鄴都獄・拔舌獄・剥皮獄・磨捱國獄・碓搗獄・車崩獄・寒氷獄・抽腸獄・油鍋獄・黑暗獄・刀山獄・血池獄・秤杆獄の名が見える。五十八回にも悟空が生死簿を調べて貰う為に、冥界に行き、地獄第一殿秦広王、第二殿楚江王、第三殿索帝王、第四殿卞城王、第五殿閻羅王、第六殿平等王、第七殿泰山王、第八殿都市王、第九殿忤官王、第十殿轉輪王の十王の名が見える。

『陳十四夫人伝』では、二冊十二段から十三段に、難産の為に死んだ珠翠を生き返らせる為に、魂を捜して陳靖姑が地獄巡りをする。十八の地獄には席香地獄・仏灯地獄・舖錢地獄・対経地獄・香台地獄・鎔舌地獄・爛河地獄・鐵遙地獄・滑油地獄・茶牢地獄・刀山地獄・孟婆地獄・斬手地獄・田螺地獄・解鋸地獄・碓摩地獄・鴛鴦地獄・血河地獄がある。

大塚英高は『西遊記』全体を通して地獄巡りをモチーフとし、孤魂超度を計ろうとする作品としている<sup>五</sup>。確かに『陳十四夫人伝』においても地獄巡りは重要な部分であり、女神を祭る場で、女神と絆を結び、女神を通して死の世界を覗きこの世に戻る体験が語られることからもうなずける。

七、「観音との縁、度々助けられる」については、『西遊記』では、四十九回に、通天河で妖怪に捕まってしまう

た三蔵を助ける為に、菩薩（魚籃観音）に手助けを頼む。もともと妖怪は菩薩が蓮花池で飼っていた金魚で菩薩は竹籃でつかまえる。

『陳十四夫人伝』では、すでに述べたように、一冊一段に陳靖姑は母が観音の指の血を飲んで妊娠したとされ、いわば観音の化身である。一冊五段では、廬山に行く途中、蜘蛛と蝗の妖怪に襲われていた陳靖姑を観音が竜女を遣わして助ける。また一冊六段では、岩石の下に閉じ込められた陳靖姑がまた観音によって助けられる。さらに法術を使って天地をひっくり返した為に、玉皇の怒りを買ひ、死罪になろうとする陳靖姑が、やはり観音によって助けられる。

八、「戦いの場面での種々な変身」については、『西遊記』では、四回に悟空と戦う哪吒は、三面六臂に代わり、六本の手に斬妖劍・砍妖刀・縛妖索・降妖杵・綉毯・火輪を持つ。七回では、悟空は七十二般の変化と不老不死、筋斗雲に乗ればひとつ飛びと如来を相手に自慢する。五十八回には、六耳獼猴が悟空に化け、自分が悟空であると言ひ張り、どちらが本物か区別が付かず難儀するが、最後に如来が正体を見破る。

『陳十四夫人伝』では、一冊四段で、陳靖姑の兄の法通が妖蛇と戦う際、十二支に次々と変じるが、何故か弟によって法術を破られてしまい、遂には蛇妖に捉えられて